



TITLE:

# 「賢」の觀念より見たる西漢官僚 の一性格

AUTHOR(S):

江村, 治樹

---

CITATION:

江村, 治樹. 「賢」の觀念より見たる西漢官僚の一性格. 東洋史研究  
1975, 34(2): 193-213

ISSUE DATE:

1975-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153579>

RIGHT:

# 「賢」の觀念より見たる西漢官僚の一性格

江 村 治 樹

はじめに

- 一 戰國末漢初の「賢」の觀念
  - 二 戰國末漢初の「賢」の機能
  - 三 官僚の主張としての「賢」(一)——「長者」と「賢」
  - 四 官僚の主張としての「賢」(二)——儒家的「賢者」
- むすびにかえて——「賢」の制度化

はじめに

漢の官僚は、漢の國家を考える上で、様々な形で問題にされてきた。中でも特に注目すべきは、「主客」論争といつてもよい一連の論争である。<sup>①</sup>すなわち、「主客」結合を體現する、戰國漢初の任俠的集團はいかなる存在であり、それはどのように漢の國家に係っていたかということが問題とされたのである。

しかし、このような論争の方向は、この論争の端緒をなした西嶋定生氏自身によつて否定された。<sup>②</sup>氏は、任俠的集團によつては、國家の中核體を説明しえても、公的な全國家を説明しえないと判斷し、改めて皇帝と人民との關係から國家を考えようとしたのである。しかし、この考え方では、官僚は皇帝の隸屬物として捨象される結果となつた。

では、任俠的集團は、公的な國家への展望を本當に有さないのであろうか。そして、漢の官僚は、皇帝の單なる隷屬物とみなしうるのであろうか。漢の官僚に自立性を認めようとする考え方は、從來より存在する。<sup>③</sup>しかし、その自立性がいかなるところに根差しているかということは、あまり問題とされていないようである。この問題を解くカギは、やはり任俠的集團にあるのではなからうか。任俠集團を構成する「主客」は、「賢」と稱される場合が多い。當時、理想的な任俠的集團の構成員は、「賢」として集團外から評價され、民衆から支持される存在であつたと考えられる。任俠的集團は、民衆との係りにおいて、公的な國家への展望を有するとともに、集團の「主」と「客」も、他の集團に從屬したとしても、自立的でありえたと考えられる。ここでは、このような豫想に基づき、「賢」という語を手がかりとして、任俠的集團の性格を検討し、それと漢の國家との關係をたどつてみたい。

### 一 戰國末漢初の「賢」の觀念

「賢」の原義については様々な説がある。侯外廬氏は、『詩經』や「石鼓文」では、「賢」が射禮や狩獵で射手を贊美するときに用いられていることから、遊牧や戰爭に來源があると考えた。<sup>④</sup>しかし、白川靜氏は、「賢」の字の發生を殷代に想定し、「賢」の初文は「𢇛」であるとしている。<sup>⑤</sup>「𢇛」は手を腫に加えた形であるから、「民」などと同様、目を傷つけられた神への犠牲、または神の奴隸を指したと言う。金文には、「𢇛」が氏族名を指すと思われる例があるから、ある特定の聖職者氏族を指していたのかもしれない。しかし、「賢」の字自體は金文にはほとんどみあたらず、「賢殷」の銘文の中に一例あるが、それは人名であり、金文より「賢」そのものの原義はたどりえない。また、藤堂明保氏は、音より「賢」の原義を考えている。<sup>⑥</sup>「賢」は「堅」と關係があり、固く充實した財貨を指し、それで、頭の内容が詰まった物識りな人をも賢者とも言つてゐる。

「賢」の原義は、以上のように様々な考えられるが、當面ここで問題となるのは、春秋から戰國にかけての「賢」の意

味である。侯氏は、善射者を「賢」の原義としたが、春秋時代にその意味は一轉して智能を評價する語となるとする。<sup>④</sup>すなわち、氏族制の崩壊により、血縁關係に基づく傳統的な氏族のはたす役割よりも、個人の知的才能が重視されるようになって始めて、智能の美稱としての「賢」という語が用いられるようになるのである。このような「賢」は、諸子百家によつて理想化され、ある特定のイメージが附與されていくと思われる。それ故、諸子百家には、それぞれ異つたイメージの「賢」の用法があると思われるので、別に考察する必要がある。

注目すべきなのは、戰國時代になると、もう一つの「賢」の用法が現れることである。「史記」などでは、侯氏の考えるような、單なる個人の智能の美稱ではなく、任俠的な行爲を「賢」と稱する場合が多くみうけられる。このような「賢」の用法は、ある特定の諸子の思想に偏しているというよりは、當時のかなり一般的な用法であつたと思われる。司馬遷の用いた史料の性格と、彼自身の立場の問題はあるが、彼は一つの時代の風潮を受けて『史記』を記述したと考えられる。

『史記』では、諸子のように、「賢」は理論化されず、生の一般的用法が現われていると考えてもいいのではなからうか。

『史記』によると、戰國時代では、食客數千人といわれ、賓客を好んだ信陵君・平原君・孟嘗君などは、「賢」の評判が高く、食客を多くかかえている者が「賢」とされている。呂不韋も、「子楚（秦の昭王の太子）は賢智にして、諸侯の賓客に結ぶこと天下に偏くす」（呂不韋列傳）と言っている。また、刺客の朱亥・聶政・豫讓など、己を知る者のために義を盡して死んだ人々も「賢」と稱されている。もちろん、智能の美稱としての用法もみられるが、人間關係を指す用法が多く目につく。<sup>⑤</sup>

楚漢の際や、漢初における「賢」の觀念について、少し詳しく見ていきたい。

張耳と陳餘は、『史記』の中でさかんに「賢」と稱されている。中でも、張耳は特に「賢」の評判が高かつた。彼は、若い時には信陵君の客となつたことがあるが、次の話は、のち外黄に亡命した時のことである。

外黄の富人の女にて、甚だ美なるあり。庸奴に嫁せしも、その夫を亡れ去りて父の客に至る。父の客は素より張耳を

知れり。乃ち女に謂いて曰く、『必ず賢夫を求めんと欲すれば、張耳に従え』と。女聽す。乃ち卒にために請決し、これを張耳に嫁せしむ。張耳は、是の時、身を脱して游す。女の家は厚く張耳に奉給す。張耳は故を以て千里の客を致し、乃ち魏に宣して外黃の令となる。名は此より益々賢なり。(張耳陳餘列傳)

張耳は、はじめ客仲間「賢」とされていたようであるが、千里も遠い所から客を招き、官に就いて、その「賢」の名聲はより一般に廣まっていた。彼は、「千里の客を致す」ために、妻の家の財力によっているが、「益々賢」とされたのは、遠くの客をも引きつける彼自身の人格に對してであると思われる。

高祖劉邦が皇帝となつた後、張耳の子の趙王張敖の臣下が、高祖の趙王に對する無禮を憤り、獨斷で高祖を暗殺しようとした。高祖は、獄吏に完膚なきまで責められたが、暗殺は獨斷で謀つたことで王は關係していないと主張し續けた。高祖は彼を壯士と思ひ、貫高と舊知の中大夫泄公に眞實を探らせたと、貫高の言には嘘偽りがないことがわかつた。そこで高祖は、趙王を赦し、また「貫高の人となり能く然諾を立つるを賢」として彼をも赦した。高祖は、貫高の然諾を重んじる誠實さ、すなわち「信」に對して「賢」として賞讃しているのである。しかし、貫高は、王の釋放を確認すると、「人臣に篡殺の名有り、何の面目あつてか復た上に事えんや。縦い上我を殺さずとも、我心に愧じざらんや」と言つて自剄して果てている。貫高は、信義を重んじるとともに自尊心の高い人物であつた。この時、彼の名は天下に喧傳されたが、それは「賢」の名聲であつたと思われる(『史記』張耳陳餘列傳)。

高祖は、田横兄弟とその客をも、さかんに「賢」と讃えている。田横は田儋の従弟田榮の弟である。彼らは、齊の田氏の一族で、「皆豪にして宗強く、能く人を得」ていた。陳涉が舉兵すると、彼らは縣令を殺して田儋を齊王として自立した。戦亂の中で田横のみ生き残り、最後に齊王となつたが、漢の將軍灌嬰に攻められて梁の彭越のもとに身を寄せた。し

かし、高祖が帝位に即き、彭越を封じて梁王とすると、田横は誅殺を恐れてその徒屬五百餘人とともに海中の島に逃れた。高祖はこのことを聞くと、「田横兄弟はもと斉を定め、斉人の賢者多く焉に附す。今海中に在りて收めざる。のち恐らく亂を爲さん」と考え、田横の罪を赦して召し寄せた。田横は客一人と驛傳に乗じて雒陽に向ったが、その手前の戸郷という所で自刎し、その首を高祖に献上させた。田横は、「俱に南面して孤と稱」した漢王に、亡虜として仕えることに忍びなかつたのである。彼も自尊心の高い人物であつた。高祖は、田横のこのような行爲に感動し、

ああ、ゆえ有るかな。布衣より起つて兄弟三人更々王たり。豈に賢ならずや。

と言ひ、田横のために涙を流した。高祖は、田横に付き従つてきた二人の客を都尉とし、卒二千人を發して王者の禮を以て田横を葬つた。だが、葬り終ると、かの二人の客はその墓の傍に穴を掘り、自刎して田横に殉じた。高祖は、この事を聞いて大いに驚き、「田横の客は皆賢なり。吾れ其餘尙お五百人海中に在るを聞く」と言ひ、彼らの信義の強さに感じて彼らを召さんとした。だが、この五百人の田横の客は、田横が死んだと聞くと、すべて自殺して果ててしまつた。ここでは、「主」である田横は高い自尊心を持ち、その「客」には強い信義がみられる。高祖は、そのような「主客」に「賢」という賞讃の辭を贈つていたのである。そして、司馬遷は、田横兄弟の列傳の末尾に次のように記している。

田横の高節は、賓客をして義を慕いて横の死に従わしむ。豈に至賢にあらずや。

司馬遷は、これほどの賢者を多數得ていた田横が、國の存續を計りえなかつたことを不思議に思つてはいるが、田横に對して最高の讃辭を贈つてゐる。彼によると、客を死に向かわせるほどの主の「高節」こそ「至賢」なのである。この高節とは、田横の王者としての自尊心を指すものと思われる（『史記』田儻列傳）。

孟舒は、前述の趙王張敖の客で、高祖暗殺未遂事件の時、詔に反して自ら髡鉗し、王家の奴として王に従ひ、高祖から「賢」とされた人物である。彼は、そこでは貫高と同じ信義の氣質を「賢」とされたと思われる。のち、文帝の時、帝が田叔に天下の長者を問うたことがある。田叔は孟舒の名をあげた。孟舒は雲中の太守として塞を堅守できず、士卒數百人を

戦死させたため免職されていたので、帝は、長者は人を殺すかと問い返した。それに對して田叔は次のように答えている。是れ乃ち孟舒の長者たる所以なり。(中略) 漢と楚と相い距ぎ、士卒は罷散す。匈奴の冒頓は新たに北夷を服し、來りて邊害を爲す。孟舒は士卒の罷散を知りて言を出すに忍びず。士争いて城に臨みて敵に死ぬること、子の父の爲にし、弟の兄の爲にするが如し。故を以て死者數百人あり。孟舒は、豈に故らに之を驅戦せしめんや。是れ乃ち孟舒の長者たる所以なり。『史記』田叔列傳)

文帝は、田叔のこの説明を聞いて感じ入り、「賢なるかな孟舒」と言つて、また彼を召して雲中の守としたという。文帝は、孟舒の士卒に對する思いやりが、子や弟が父や兄の爲に盡すのと同じように、彼らを自然に死戦に赴かせたことに對して「賢」として感動した。「賢」とは、ここでは多くの士卒の強い信望を得ている官僚を指している。そして、そのような「賢」なる人物は、「長者」でもあったのである。

以上のように、戰國末漢初での「賢」は、「主客」の關係と密接な係りを持つてゐる。まず、「客」の行爲に注目すると、「主」に對する徹底的な獻身が認められる。時には、それは死によつて證明される。しかも、その行爲は、「主」に對する盲目的な隷屬ではなく、信すべきもの(例えば田横の高節などに殉ずるという自發的な行爲である。そして、彼らには強烈な自尊の精神がみられる。「客」は「主」に對して盲目的に隷屬していたのではなく、自尊心を支える何らかの強固な道義的世界を保持したまま「主」に結合してゐたと思われる。そのような「客」こそ「賢」なのである。一方、「主」も、自尊心の高さが「賢」と讃えられるとともに、多くの客を引きつける人格の具有者としても「賢」とされている。

「客」の強い信望を得た高節の人物こそ「賢者」なのである。「賢」なる「主」とは、いわば、「賢」なる多數の「客」の心を獲得した人物と言つてもよいであらう。戰國から漢初において、「賢」とは、このような「主客」結合の理想的な状態を表わす語であつたといえる。

なお、全人格を表わす「賢」として注目すべきは、「賢豪」「賢大夫」「賢士大夫」などの語である。「賢豪」について

は、「縣中の賢豪」とか「邑中の賢豪」という言い方がされ、ある地域の特別の人間を指す。『史記』游俠列傳には、しばしば「賢豪」の稱がみられる。雒陽に相仇する者がおり、「邑中の賢豪」數人がその仲をとりもととしたがラチがあかず、遊俠の郭解がとりまとめたという話がある。「賢豪」は地域の調停者である。また、邑中の少年や「旁近縣の賢豪」などで、郭解を夜半に訪問する者が常に十餘車もあつたことや、解が入關した時、「關中の賢豪」は、彼に面識がない者まで、その名聲を傳え聞いて、争つてよしみを通したことなどの記述もある。少年と併記されている「賢豪」は、おそらく地方の實力者であり、任俠の親分でもあつたようである。司馬遷は、遊俠の長所を、「士の窮窘して命を委ぬるを得。これ豈に人の謂う所の賢豪の聞なる者に非ずや」（游俠列傳）と言っている。「賢豪」とは、まさしく、ある地域で人望のある任俠はだの人物なのである。

「賢大夫」「賢士大夫」も同様にある種の人格に對する美稱であるが、先の郭解の話では、郭解は、「邑中の賢豪」を「邑中の賢大夫」と言い換えているから、兩者は同じような意味あいでも用いられていたと思われる。また、項梁は人を殺して仇を吳中に避けていたが、「吳中の賢士大夫」はみな彼の下に出たという（『史記』項羽本紀）。梁は、吳中に大縣役や喪事があると、そのことを主辯したというから、梁の來る前は、「賢士大夫」たちが通常そのことを執り行つていたようである。「賢士大夫」は、政府の下請けとか、地域の民間行事をとりしきつていた土地の實力者と思われる。要するに、漢初では、「賢」が任俠的な意味で用いられることが多いから、これらの「賢豪」「賢大夫」「賢士大夫」も、任俠はだの、民間の實力者、人望家に對する美稱であつたと考えてもいいのではなからうか。彼らこそ、漢帝國の基底に存在した、現實の「賢者」たちであつたと考えられる。

## 二 戰國末漢初の「賢」の機能

「賢」は、人格上の價值を表わす言葉である。しかし、單なる抽象的な價值ではなく、非常に具體的で現實に根差した



價値を表わす言葉である。戰國漢初の「賢」者は、現實に存在する任俠的な人格であつた。「賢」は、具體的なるが故に、より一般的な廣がりをもつた評判として機能していたと考えられる。

では、「賢」と評判されることは、戰國漢初において、どのような意味を持ったのであろうか。それはやはり、統治者あるいは政治人としての資格を一般に認められることであつたと考えられる。

陳涉・吳廣は、舉兵した時、秦の公子扶蘇と楚の將項燕を詐稱した。陳涉は、扶蘇を詐稱した理由として、扶蘇こそ秦を繼ぐべき正嗣であるということと、「百姓多く其の賢を聞く」ということをあげている。彼は、「賢」の評判が高く、秦の正嗣とみなされた扶蘇を詐稱することにより、「民の欲」に従おうとしたのである。「賢」の評判をたてられることは、民衆に指導者として公認されることであつた。しかも、扶蘇は、悲劇の人物として同情されているだけでなく、「數々諫むるの故を以て、上外に兵を將いしむ」とあり、始皇帝の無道を諫める氣概のある人物とみなされている。このような氣概は任俠に通じるものであろう（『史記』陳涉世家）。

先に、張耳が「賢」の評判の高かつたことをあげた。のち、張耳は陳餘と知り合い、ともに行動するのであるが、この兩人は陳涉が舉兵すると、彼に目通りを求めた。その時、陳涉とその側近は、「生平、數々張耳・陳餘の賢なるを聞くも、いまだ嘗て見えず」（『史記』張耳陳餘列傳）という實狀であつたので非常に喜んだ。陳涉は、兩人の獻策は納れなかつたものの、その「賢」に感じて、武臣の部下として趙の地を攻略させている。兩人は、當時秦に對して「天下の唱をなした」陳涉に「賢」の評判によつて任用されたといえる。のち、項羽は秦を滅ぼし、西楚の霸王と稱して、諸將・功臣を封建した。この時、張耳・陳餘の場合は、「賢」の評判が封建の一つの理由とされている。

趙相張耳は素より賢にして、また入關に従う。故に耳を立てて常山王となし、趙地に王たらしめ、襄國に都せしむ。成安君陳餘は將印を棄てて去り、入關に従わず。然れども素よりその賢にして趙に功あるを聞く。その南皮に在るを聞けり。故に因りて三縣に環封す。（『史記』項羽本紀）

この時の項羽による封建は、軍功と項羽個人に對する關係が基準とされており、方々から不公平のそしりがでた。項羽個人との關係が薄かった兩人の封建は異例である。兩人の場合のみ、「賢」、すなわち民間での評判を重視しているのは、公平を装うものとみられなくもない。個人的關係を重視した項羽にあつても、「賢」の評判は無視できなかったものと思われる。

次に、漢の高祖が「賢」と判断した場合を見てみよう。前述の趙王張敖の臣下による高祖暗殺未遂事件の時、高祖は趙王を召し出すに際して、前もって「趙の君臣賓客に敢えて王に従うもの有らば、皆族せん」という詔勅を出していた。高祖は、その詔勅を無視して王に従ったのであるが、その他、客の孟舒ら十餘人も、みな髡鉗して王家の奴として王に従った。高祖は、貫高の壯絶な死に感じ入ったのであろう。彼は、この一族皆殺しにすべき諸客をも「賢」とし、すべて諸侯の相や郡守に任用した。司馬遷によると、景帝の時まで、これらの諸客の子孫はみな二千石の官となることができたという（『史記』張耳陳餘列傳）。また、前述の、田横に付き従った二人の客を、高祖が都尉としたのも、趙王の諸客と同質の行爲を「賢」として任用したのである。さらに、海中に残った田横の客五百人を召そうとしたのも同様に考えられるであろう。

季布は任俠者であり、楚に有名であつた。彼は、項羽の將軍として、しばしば高祖を苦しめた。それで、高祖は項羽を滅ぼすと、彼に千金の懸賞金をかけて搜索した。季布は、同じく任俠者として有名であつた朱家に匿われた。しかし、朱家は隠しおおせそうにもないと考えて、汝陰侯の夏侯嬰に、「賢者」である季布を「私怨」によつて追求することは天下に高祖の心の狭いことを示すだけでなく、敵國を資するものであると説いた。夏侯嬰が高祖に朱家の言葉どおり言上すると、高祖は季布を赦して郎中に拜した（『史記』季布欒布列傳）。高祖は、季布の「賢」なることを認めたが故に、「私怨」を乗り越えて彼を任用したものと思われる。

趙王の客にしろ、田横の客にしろ、また季布にしても、彼らは高祖に對して獻身したわけではない。逆に、みな反逆者

とみなしうる人々である。高祖は、彼らを「賢」として稱讃した。しかし、これは、いままで述べてきたように、高祖の獨斷によるものではない。一般の通念としても、彼らは「賢」としてしかるべき人々であった。高祖は、私情を乗り越えて、一般に評價されうる「賢人」を任用したと考えられる。このような、漢の皇帝としての高祖の性格を端的に示しているのが、漢の十一年二月の「賢士大夫」任用の詔である。

（前略）今、吾は天の靈、賢士大夫を以て天下を定有し、以て一家となし、其の長久にして世世宗廟を奉じて絶つこと亡きを欲するなり。賢人已に我と共に之を平らげたり。而して吾と共に之に安利せざるは可なるか。賢士大夫に肯えて我に従いて遊ぶ者あらば、吾は能く之を尊顯せん。天下に布告し、朕の意を明知せしめよ。御史大夫昌は相國に下し、相國鄧侯は諸侯王に下し、御史中執法は郡守に下せ。其れ意稱明德ある者は、必ず身ら勸め、之が爲に駕し遣わして相國府に詣らしめ、行義、年を署せ。有りて言わず、覺すれば免ぜん。年老痿病は遣わすなかれ。『漢書』高

帝紀下）

勞榦氏は、この「賢人」の基準は、後に知識が重んぜられたのとは違い、「行義」と「年」であり、耆宿が主に挙げられたとする。しかし、前述のとおり、漢初における、この「賢士大夫」も、任俠的な氣概を有する郷里で人望のある實力者であると思われる。「意稱明德」は、そうした聲望を指している。この詔勅は、在野の人望家を漢帝國に組み入れるものであるとともに、帝國が、はじめて公式に「賢人政治」をめざすことを天下に表明したものと見える。「賢」の制度化のきざしは、すでに漢初に見出されるのである。

### 三 官僚の主張としての「賢」——「長者」と「賢」

戰國末漢初における一般的「賢」は、任俠的意味あいを持ったものであり、「賢」たることは統治者あるいは政治人としての資格であった。陳涉や高祖などは、そのような「賢」を任用の基準とし、項羽は封建の一つの理由に入っていた。

特に、漢初においては、官僚任用の一般的基準ともなっている。それ故、官僚の側でも、「賢」の内容は大きな問題であった。次に、西漢の官僚にとって、「賢」は、自らを律するものとしていかに觀念されていたかを見ていきたい。

上田早苗氏は、漢初の理想的人間として、「長者」をあげているが、それは、そのまま當時考えられた官僚の理想像とみなしてもよいと思われる。上田氏によると、「長者」とは、重厚と自尊をモットーとし、黄老術と任俠的結合を體現するものである。

漢初では、政治術として、黄老術が盛行したことは周知のとおりである。黄老術では、無爲の政治が尊重され、自然の成行きに任ずることを理想とした。だから、「長者」は、政治の「大體」を重んじ、部下の政治に對して細かな干渉はせず一任している。汲黯は、黄老の言を學び無爲清靜を好んでいるから、「長者」と考えられるが、「丞史を擇びて之に任じ、大指を責むるのみにして苛小ならず」、「大體を弘め、文法に拘わらず」(『史記』汲黯列傳)という政治を行った。曹參も、黄老術を膠西の蓋公より傳授され、相國に拔擢されると、「郡國の文辭に木訥にして重厚なる長者を擇んで丞相史とし、國政を任せている(『史記』曹相國世家)。「長者」は、細かい法律の運用を職務とする「文史」とは對象的に、「大體」を重んじ、黄老的「重厚」さを有するのである。

次に、上田氏は、「長者」のもう一つの特徴である任俠的性格は自尊と表裏一體の關係にあるとする。任俠は、「仁・義・信など自己の品性に對する自尊心ないし名譽心を堅持することと定義」できるから、自尊を重んじる「長者」も、任俠と共通する基盤を有するのである。

上田氏の提示した、このような「長者」の觀念は「賢」の觀念と共通するものを有していることは明らかであろう。前に、「長者」とされている孟舒が「賢」と稱されている例をあげた。また、曹參は齊相として黄老術によって齊を治め、「齊國安集」して大いに「賢相」と稱されている。汲黯も、武帝や大將軍衛青に「賢」と稱されている。漢初においては、「長者」こそ「賢者」であったのである。

では、「長者」の任俠的な自尊の側面は、現實の政治の中にどのように現れているのであろうか。『史記』は、汲黯の性格を次のように記している。

好みて游俠を學び、氣節に任じ、内に脩潔を行い、直諫を好み、數々主の顔色を犯す。(中略)亦、數々直諫するを以て久しく位に居るをえず。

淮南王謀反す。黯を憚りて曰く、『直諫を好み、節を守りて義に死す。惑わすに非を以てすること難し』。(汲黯列傳)「長者」である汲黯は、「直諫」を好むが、その性向は彼の任俠的な氣質と關係がある。諫争こそ、「長者」の任俠的側面の政治における現れでなからうか。自尊を支える、強固な任俠的世界に生きる「長者」にとって、そのような世界にもとる君主の言動は放置できないのである。そして、そのような心性こそ、「長者」であり、「賢者」である資格であつたと考えられる。

#### 四 官僚の主張としての「賢」(二)——儒家的「賢者」

武帝以後になると、經書の素養を有した、いわゆる「儒家的」官僚が政界の大勢を占めるようになる。彼らは、皇帝に對して、さかんに「賢を舉げよ」とか、「賢を求めよ」という主張をくりかえす。すなわち、「賢人政治」の主張である。では、そのような儒家的官僚の考える「賢者」の觀念はいかなるものであつたのであろうか。

漢代儒學の大成者、董仲舒は、「大學」の設置と「貢士」の制度によつて、士を教育し世間の「賢人」を廣く集めることを主張した。彼は、その教育内容の統一と選拔の基準として、「六藝の科」「孔子の術」をあげている。彼にとつて「賢人」とは、そのような學問を身に付けた人間であつた。この考えは、彼以後、多くの官僚に受け繼がれている。

しかし、儒家的官僚の考える「賢」は、單に、政術としての儒學をマスターした者を指しているのではない。

華陰縣の守丞の嘉という人物は、當時無官であつた朱雲を御史大夫とするよう上書しているが、その文中で、「治道は

賢を得るに在り」と述べ、「平陵の朱雲は文武を兼資し、忠正にして知略あり」（『漢書』朱雲傳）としている。もちろん朱雲を「賢」としているのであるが、その美點として忠正と智略をあげている。朱雲は、若い時輕俠に通じ、客を助けて仇を報じた任俠者であつたが、のち四十にして節を改め、『易』や『論語』を學んだ。しかし、彼の任俠的性格は變らず、成帝の前で極諫して帝を大怒させ、死罪を言ひわたされるほどであつた。彼の「忠正」はその任俠的氣質によるものであり、「文武」の「文」や「智略」は儒家的な教養を含んでいると思われる。

傳喜は、「少くして學問を好み、志行有り」といふような人物であるが、大司空の何武と尚書令の唐林は、彼を辯護するのに、「傳氏の賢子なり」といふ評判をあげて、「行義修絜、忠誠憂國、内輔の臣たり」（『漢書』傳喜傳）と言つてゐる。この場合も、「賢」は、學問、知識と操行を含んでいる。

谷永は、少府の薛宣を御史大夫に推薦し、「竊に見るに、少府宣は、材茂行絜、從政に達す」「臣聞くならく、賢材は治人より大なるはなし。宣は已に效あり。その法律は廷尉に任じて餘あり。經術は文雅にして以て王體を謀り國論を斷ずるに足る。身は数器を兼ね、退食自公の節あり」（『漢書』薛宣傳）と述べてゐる。薛宣の「治人」（治民）の實績をみると、彼が賢材を具えていることがわかる。その内容は、「材茂行絜」であり、「法律」の習熟は廷尉として十分任に堪え、「經術文雅」で「退食自公の節」を含んでいる。彼も、操行と政術をもに具えているのである。

李尋も「賢士」を求めることを主張するのであるが、哀帝の時、次のように對策している。

宜しく少しく外親を抑え、左右を選練し、德行有りて道術通明なる士を擧げて天官に充備すべし。然る後に以て聖德を輔し、帝位を保ち、大宗を承くべし。下は郎吏從官に至るまで行能の以て異なく、また一藝に通ぜざるもの、及び博士の文雅なき者は、宜しく皆南面を就かしめ、以て天下に視すべし。（『漢書』李尋傳）

李尋は、「德行」があり、「道術」に通じた者を「賢士」とするのである。そして、現職の官僚すべてに對しても、「行」と「能」に特にすぐれず、「一藝」に通じていない者は官僚として資格なしとしている。

要するに、儒家的「賢者」とは、儒學の素養と操行を兼ね具えた人物である。<sup>⑧</sup> 操行といっても、儒學に基づいた「禮」になつた行爲とか、「孝弟」や抽象的な「德行」をあげている場合が多いが、注目すべきは、一種の氣節ある行爲の場合である。任俠の氣風を持つ朱雲の「忠正」や、周堪の「論議正直」、傅喜の「忠誠憂國」などは、その場合に入ると思われる。特に、「忠」について考えてみたい。

官僚は、臣下として、當然君主に對して「忠」であらねばならなかつた。<sup>⑨</sup>「忠」は君主にまことを盡すことであつても、君主におもねることではない。「忠臣進諫」という連語や「忠諫」という語があり、忠臣とは進諫者であつた。賈山は、「人臣たる者は忠を盡して愚を竭し、以て主を直諫して死亡の誅を避けざる者」（『漢書』賈山傳）と言っており、夏侯勝は、「人臣の誼は宜しく直言正論し苟くも阿意順指するに非ず」（『漢書』夏侯勝傳）と言っている。また、主父偃は、「明主は切諫を惡まずして以て博く觀、忠臣は重誅を避けずして以て直諫す。是の故に事に遺策なく、而して功は萬世に流る」（『漢書』主父偃傳）と述べている。そして、一般に諫争する臣は稱讃され、逆の場合は非難された。劉向は夏侯勝のことを「敢えて直言するを名とし、天下美とす」（『漢書』劉向傳）と言ひ、逆に兒寬は、御史大夫として久しく武帝を「匡諫」しなかつたため、官屬に輕んぜられてゐる（『漢書』兒寬傳）。漢代では諫争が重んぜられ諫争の例は『史記』『漢書』に枚舉にいとまがない。諫争する臣こそ忠臣と考えられ、理想とされた。だから、忠であることは、諫争するほどの氣概を有することである。「長者」が諫争を好んだのは、多分に任俠的な氣質によつてゐた。儒家的「賢者」にも、任俠的意味あいが含まれてゐると考えられないであらうか。朱雲の例を單に特別なものと考えすることはできないであらう。周堪の「論議正直」も、このように考えると多分に任俠的なものであらう。

しかし、諫争を儒家的「賢者」の特質と考えうとしても、「長者」のように、單にその氣質のみによつては理解しえない點がある。彼らは、諫争の體制を理論的に構築してゐるのである。賈山は、その著『至言』に次のように言う。

昔者、夏商の季世は、關龍逢、箕子、比干の賢と雖ども、身は死亡して道は用いられず。文王の時、豪俊の士は皆そ

の智を竭すを得、芻蕘採薪の人は皆その力を盡すを得たり。此れ周の興る所以なり。故に地の美なる者は善く禾を養い、君の仁なる者は善く士を養う。(中略) 古者、聖王の制は、史は前に在りて過失を書き、工は箴を誦して諫め、瞽は詩を誦して諫め、公卿は比諫し、士は言を傳えて過を諫め、庶人は道に謗し、商旅は市に議せり。然る後に君は其の過失を聞くを得るなり。其の過失を聞きて之を改め、義を見て之に従うは、永く天下を有つ所以なり。天子の尊、

四海の内、その義として臣たらざるなし。(『漢書』賈山傳)

そして、賈山は後文で、秦が亡んだのは天下の人々がその過失を告げなかったためであり、「養老の義なく、輔弼の臣なく、進諫の士なく、縦恣に誅を行い、誹謗の人を退け、直諫の士を殺」したためであると言う。賈山によれば、國家の根本は「養士」、すなわち士を禮遇し重んじることであり、賢人を任用することである。そのためには諫争の體制を確立しなければならぬ。賢人はいづれの世にも存在するが、自由に進言でき、君主の過失を諫めうる體制がなければ、その機能は果せないのである。そのような體制こそ、彼にとって理想的な「聖王の制」であった。

賈誼も賈山と同じような諫争の體制を考えている。<sup>③</sup> 彼の場合は、太子の教育に限定されているが、それは賈山の「聖王の制」とほぼ一致する。

賈山や賈誼の思想は、西漢の儒教の基礎づけの役割を果たしたといわれるように、<sup>④</sup> 後の儒家的官僚にとっても、「養士」「求賢」と「諫争」とは密接な關係をもつて主張された。賢人を任用して禮遇し、その言論の自由を保證することは、「賢人政治」の大前提と考えられた。

王褒は、宣帝の詔に答えて次のように述べている。

夫れ、賢者は國家の器用なり。(中略) 賢人君子も亦聖王の海内を易むる所以なり。是を以て嘯喩して之を受け、寛裕の路を開き、以て天下の英俊を延<sup>ひか</sup>うるなり。夫れ、知を竭し賢に附く者は必ず仁策を建つ。人を求め士を求むる者は必ず伯迹を樹つ。(『漢書』王褒傳)



また谷永も、成帝に對して、

陛下、誠に寛明の聽を垂れ、忌諱の誅なく、芻蕘の臣をして聞する所を前に盡し、後患を懼れざるを得しめよ。直言の道開かば、則ち四方の衆賢は千里を遠しとせず、輻湊して忠を陳べん。『漢書』谷永傳

と言っている。「諫争體制」は、「賢人政治」實現のための大前提であり、官僚たちは、その體制を確立するため努力を續けている。

董仲舒は、「諫争體制」について一つの理論展開を行っている。<sup>⑤</sup> 賈山や賈誼、また原始儒家たちの考えでは、君主は賢人を擧用して意見や諫言を傾聴すべきであり、君主を諫めるはあくまで人間であった。だが、董仲舒は、人のかわりに「天」が直接君主を諫めるものと考える。その災異説では、人の行爲は陰陽の理に従って直接天に通じ、君主の過失は天に現われる。

國家將に失道の敗あらんとすれば、而らば天は迺ち先ず災害を出して以て之を譴告す。自ら省るを知らざれば、又、怪異を出して以て之を警懼す。尙お變を知らざれば、而らば傷敗迺ち至る。『漢書』董仲舒傳

彼によれば、人が諫めるのではなく、天自身が「災害」「怪異」によって君主を諫めるのであり、君主に對する官僚の抑制力は、より確實な後ろ楯を得たことになる。だが、これは人の諫争の否定ではない。のち實際には、災異説は人の諫争を強化する役割を果たしている。鮑宣は、

上の皇天は見譴し、下の黎庶は怨恨し、次いで諫争の臣あり。『漢書』鮑宣傳

と述べている。董仲舒は、災異説によって「諫争體制」の強力な裏付けを行ったといえる。

以上、西漢を通じての、官僚の主張する「賢」の内容を見てきた。漢初の「賢者」である「長者」も、政術は異なるが、ともに相通じる氣質を有していた。それは、戦國漢初に一般的に全人格を表わした、任俠的な「賢」の内容とも一致する。さらに両者は、現實政治においては、諫争を重じるといふ共通點も有していた。このような官僚を單に君王の諫屬

物とみなしうるであらうか。西漢の官僚は、自己の強固な道義的世界に生きた、人格上自立した存在であったと思われる。

### むすびにかえて——「賢」の制度化

戦國漢初においては、任侠的な氣質を持った人々が一般に「賢」とされ、君主も、そのような人々を任用しようとした。また一方、官僚の側でも、そのような意味あいを多分に持った「賢者」を理想とした。特に儒家的官僚は、君主に對して「求賢」と「諫争體制」の確立を強く主張した。「長者」は、そのような體制を積極的には主張しないが、その行動様式はこれに通じるものがあつた。「賢」に對する以上のような君主の對應と、官僚による「賢」の主張とはあいまつて、漢の制度の中にも現れていると思われる。最後に、官僚の主張にみられた「求賢」と「諫争」の制度化に簡単にふれたい。

まず、「求賢」について見ると、高祖は、沛公であつた時分から「求賢」に意を用い、部下をしてその出身の邑中の「賢士豪俊」を推薦させている。<sup>③</sup>帝位に即いてからの「求賢」は、前述の趙王張敖の客の郡守諸侯相への任用や漢の十一年二月の詔に明らかである。この詔は、後の郷舉里選の制のさきがけとして注目される。文帝になると、「求賢」への意欲はより強くなる。その二年には賢良方正能直言極諫者を舉げており、また、「孝悌」「力田」「三老」「廉吏」を賢としてそれらに賜與したり、「右賢、左戚」を表明したりしている。<sup>④</sup>

高祖や文帝の場合には、「求賢」は、隨時詔令によつて表明されるに留り、制度として固定化されていなかったが、武帝は「求賢」を漢帝國の制度の中に定着させた。それは常舉の選舉制度の制定であり、のち漢の官僚任用に大きな位置を占めたことは周知のとおりである。この制度の中での「賢」の内容は、儒家的色彩が強く、漢初とは意味あいの變化もみられるが、郷里での評判に基づくことを原則とすることは變りがない。

「諫争」についても制度化がみられる。官僚機構からみると、武帝の元狩五年に諫大夫が置かれていることに注目される。諫大夫は、その名稱の示すとおり、諫争を職とする秩比八百石の官である。これは他の顧問官である太中大夫、中大夫（光祿大夫）より秩はかなり低く、あまり重い官とはいえない。だが、諫大夫は、「諫争體制」の象徴的存在であつたといえないであらうか。

宣帝は、元康元年頃、博士や諫大夫の政治に通じているものを選び、郡の太守や王國の相に補して治績をみようとしたが、平原の太守に出されることとなつた蕭望之は猛烈にこの方針に反對した。彼は、朝廷の政治に直接參與する内臣を重視し、中でも諫官を政治の中核と考えている。政治の本である諫官の正常な働きは、政治の正常さを示すと考え、「外郡の治らざるも、豈に憂うるに足らんや」と言う（『漢書』蕭望之傳）。また、成帝の時、諫大夫の劉輔は帝を極諫したため掖庭の秘獄に繋がれてしまった。そこで、内朝の左將軍辛慶忌らは上書して帝を諫めた。彼らは、皇帝が諫争の官を尊べば、他のすべての官僚も、安心して「忠を竭し謀を盡す」ことができる（『漢書』劉輔伝）。諫大夫は、官僚の行動發言を保証するための象徴的存在なのである。この官は、官制においては微少な存在であつたが、官僚の機能にとっては大きな意味を持っていたのである。

先に、「求賢」のところで、文帝が賢良方正能直言極諫者を始めて擧げたことを述べた。この賢良方正は、以後主として災異の時と皇帝の即位の初めにしばしば擧げられている。平井正士氏は、即位の初めにこれを擧げたのは、初政にあたり祖宗の大業を承けた重大責任を痛感し、政治の根本である人材を得る決意を明らかにするためであるとする。また、勞餘氏は、賢良方正を擧げた目的を、直言の路を開くためであるとする。賢良方正察舉は災異の後であり、「直言極諫」を併稱することが多いからである。すなわち、賢良方正を擧げるのは、皇帝が即位や災異に際して賢者を求め、その直言を聞き入れることを天下に表明するためにほかならない。賢良方正察舉こそ、「求賢」と「諫争」の理念を結合した制度といえる。

以上、漢の制度に現われた、「求賢」と「諫争」の制度化の例を挙げ、漢の國家に任俠的集團の結合原理と同質の性格が存在することを一瞥した。もちろん、漢の國家は任俠的集團がそのまま成長したものではなく、以上の考察では皇帝支配そのものの説明にはならない。漢の國家も傳統を背負っており時代をより期った考察が必要である。しかし、漢代では、新しい統治型式である「賢者」による政治が國家を大きく規定していたことも確かである。後には、官僚による以上のような「賢人政治」の要求は、官僚自身のあり方を規定するだけでなく、皇帝自身をも規定するようになる。皇帝も「賢」であらねばならなくなるのである。そうなると、傳統的な皇帝世襲は否定され、禪讓の考え方が表面化する。王莽政権の成立は、漢代の「賢人政治」への政治の流れの行き着く所であつたと思われる。

# 註

① より詳しくは、拙稿「漢代官僚論の研究的考察——とくに「主客」論争によせて——」（『名古屋大學東洋史研究報告』三）を参照。

② 『中國古代帝國の形成と構造』一九六一年、東京大學出版會。

③ 守屋美都雄「中國古代の官僚と豪族」（『歴史教育』第一三卷第六號）、濱口重國「漢唐の間の家人という言葉について」（『山梨大學學藝學部研究報告』第十一號）「中國史上の古代社會問題に關する覺書」及び「『覺書』の補記」（『唐王朝の賤人制度』、宮崎市定『九品官人法の研究』『歴史教育』第一三卷第六號、好並隆司「漢代官僚制の形成過程——高祖から文帝へ——」（『國史學』一〇）などに認められる。

④ 「中國古代國民晚出與賢人考」（『中國古代社會史』一九四九年、生活・讀書・新知聯合發行所）。

⑤ 『漢字』（岩波新書）。

⑥ 『三代吉金文存』には「𠂔」の字を含む器が四つある。〈鳥且癸𠂔〉と〈中子賁𠂔〉は「𠂔」の字は銘文の末尾にあり、

「𠂔」は氏族のシンボルであつたと思われる。〈𠂔父癸𠂔〉は「𠂔父癸」の三字のみで殷器と思われ、文頭の「𠂔」は氏族を表わす。〈文父丁𠂔〉は象形文字としては整わない文字を含み贗作と思われる。『續殷文存』には〈𠂔且丁𠂔〉があり、これも三字のみで「𠂔」の字は「𠂔」の字を九十度回轉したものである。形式は〈𠂔父癸𠂔〉と同じで殷器である。

⑦ 銘の内容は、公弔が賢に百畝の糧を與えたことを記す。郭沫若氏は、公弔を康叔とし、この器を周初のものと考える（『兩周金文辭大系攷釋』）。

⑧ 『漢字語源辭典』一九六五年、學燈社。

⑨ 候外廬氏前掲論文。

- ⑩ 日原利國氏は『公羊傳』でも任俠を「賢」として禮賛していることを指摘している（『春秋公羊傳における俠氣の禮賛——所引の説話をめぐって——』（『日本中國學會報』第二十四集）。
- ⑪ 戰國の諸子・遊説者も「賢」と稱される。張儀は蘇秦に「天下の賢士」と稱され、甘茂は蘇代に「賢人」と稱され、のち秦の応侯となった范雎も王稽や鄭安平に「賢」とされている。また齊の稷下の先生といわれた淳于髡・慎到・環淵・接子・田駢・騶夷なども「天下の賢士」とされている。（以上『史記』。これらの「賢」は、諸子の理想とする「賢」とともに別に考察する必要がある。
- ⑫ もちろん、漢初においても、「賢」は必ずしも任俠的なあり方のみを示しているとは限らない。侯氏の定義した「智能の美稱」としての用法もみられ、機知とか策謀などの思いもよらぬ説得力のある言辭を稱讃する場合にも用いられており、諸子の理想とする「賢」とともに別途に考察する必要がある。
- ⑬ 『史記』會注考證本では、「賢豪聞」となっているが、〈考證〉では、中井積徳は聞の字は衍字とし、瀧川亀太郎は、楓山三條本では聞が聞となつてゐるとしてゐる。ここでは「聞」の方をとつた。
- ⑭ 宮川尚志氏は、漢初の賢士大夫について、「この場合の士大夫は官途に就いているという地位を主にして言つたのではなく、その社會的地位聲望の現れの一として官界に進入しうる地方豪族を指している」としている（『六朝史研究 政治社會篇』一九五六年、日本學術振興會）。
- ⑮ 『漢書』陳勝項籍傳では「民望」となっている。
- ⑯ 『史記』張耳陳餘列傳では、「項羽亦素數聞張耳賢、乃分趙、立張耳爲常山王、治信都、信都更名襄國」となっており、明らかに「賢」の評判による封建である。
- ⑰ 田榮は齊王市が膠東に移されたのが不満で反亂を起し、漢王劉邦も不満のまま就國したが、のちすぐに背いている。また當の陳餘も侯であることが不満で、項羽はもとの王を醜地へ追いやり部下の群臣諸將を善地の王としたとして非難し、齊より兵を借りて背いている。
- ⑱ 『文選』王融曲水詩序の李善注は、『漢書』のこの部分を引き「意稱」を「懿稱」としている。錢大昕は、この「懿稱」を美稱の意としている。
- ⑲ 「漢代察舉制度考」（『中央研究院歷史語言研究所集刊』第十七本）。
- ⑳ 「漢初における長者——『史記』にあらわれた理想的人間像」（『史林』五五卷三號）。以下「長者」については、ほぼこの論文によつた。
- ㉑ 『漢書』張馮汲鄭傳では、「引大體」となっている。
- ㉒ 「文吏」は、「刀筆之吏」「文法之吏」とも言い、法律の運用に巧みな法術主義的な官僚であり、武帝から宣帝の時にかけて活躍した。「文吏」は、後述の儒家的官僚とも對立するものであり、「長者」と儒家的官僚の方が共通点が多い。「文吏」は、政治において必須である文書事務より成長してきたものと思われる。「文吏」については、江幡眞一郎「漢代の文吏について」

〔田村博士頌壽東洋史論叢〕に詳しく。

23 増淵龍夫氏も直諫と任侠の關係に注目している（漢代における國家秩序の構造と官僚〔中國古代の社會と國家〕所收）。

24 『漢書』董仲舒傳。

25 「忠」と諫争の關係は後述する。

26 その他、雋不疑、馮野王も「賢」とされているが、ともに儒學の素養と操行をそなえた人物である。また、儒學が操行のどちらかをあげて「賢」としている場合も多いが、欠けている方を當然のこととして記さないだけであると思われる。例えば、貢禹は、古の「任賢使能」を主張し、「眞賢」は「孝弟」とし、翼奉や長安の令楊興は、「經」に通達した者を「賢」としている。なお、皇帝自らも、「賢」に關して同様に考えている。元帝の詔に、「河東太守堪、先帝賢之、命而傳朕。資質淑茂、道術通明、論議正直、秉心有常。發憤愔愔、信有憂國之心」（『漢書』劉向傳）とある。周堪は、宣帝より「賢」とされたのであるが、元帝の判斷では、彼は知識としての「道術」に通じ、その操行は「淑茂」であり、正しく眞直ぐな論議をする人物であった。

27 一般に、官僚が彈劾される時には、「爲臣不忠」（『漢書』劉向傳、王商傳など）という語が用いられる。また、「人子之孝」と「人臣之忠」が併稱され（『史記』韓長孺列傳、「忠臣」という語もよく用いられる。忠たることは臣としての義務でもあったのである。

28 『史記』齊悼惠王世家。

29 『漢書』梅福傳。

30 太子が成人して保傅の嚴を免れると、「有記過之史徹膳之宰進善之旌諄諄之木敢諫之鼓。誓史誦詩、工誦箴諫、大夫進謀、士傳民語」と述べている（『漢書』賈誼傳）。

31 金谷治『秦漢思想史研究』一九六〇年、日本學術振興會。

32 重澤俊郎『周漢思想研究』一九四三年、弘文堂。

33 『史記』酈生陸賈列傳に、「沛公麾下騎士、適酈生里中子也。沛公時時問邑中賢士豪俊」とある。

34 『史記』孝文本紀。

35 『史記』孝文本紀、十二年三月。

36 『史記』孝文本紀、十四年。

37 武帝の元光元年に始まる孝廉科と、元朔五年に制定された博士弟子員科である。漢代の選舉制度については、永田英正「漢代の選舉と官僚階級」（『東方學報』京都四一）に詳しい。

38 孝廉科は、孝と廉の二科に分れており（ただし西漢末には一科となる）、孝悌と廉潔が選舉の基準であった。孝悌は儒教の重要な徳目である。

39 『漢書』百官公卿表上。ただし、『後漢書』の集解に引かれた『齊職儀』には秦置となっている。

40 諫官といえば普通は諫大夫を指す（『漢書』蕭望之傳、劉輔傳）。また、諫大夫鮑宣は、哀帝に上書して諫めた時、「官以諫争爲職」と言っている（『漢書』鮑宣傳）。

41 「賢良方正を擧げた動機について」（『史潮』五一）。

42 勞餘氏前掲論文。

## An Aspect of the Western Han Bureaucracy Considered in Light of the Concept of the “Worthy” (xian 賢)

*Haruki Emura*

In considering the nature of officials under the Han dynasty, it is necessary to note the existence of the groups of military adventurers characteristic of the Warring States and early Han periods. Throughout this time, the ideal member of a band of these soldiers of fortune was evaluated outside the group and supported by the masses on the basis of the “Worthiness” (xian) attributed to him. Therefore those who were trying to gain mastery over the empire made efforts to assemble these “Worthies” (xian-zhe 賢者) and appoint them to positions of authority. Furthermore even in cases where they are serving under such a leader, the “Worthies” could preserve an autonomous existence on the basis of their popular support.

The chang-zhe 長者, the ideal official of early Han times, as well as the Confucian-bureaucratic version of the “Worthy”, shared common characteristics with the earlier “Worthy” dating from the Warring States period. Great weight was attached to the bureaucrat’s soldier-of-fortune aspect during the whole Western Han; in actual politics, this kind of bureaucratic style was evinced in the importance attached to debates over policy. Confucian officials in particular regarded debate over issues as the precondition of “the politics of the Worthy” (xian-ren zheng-zhi 賢人政治). “Seeking out the Worthy” was also important, but it was considered that if the “debate system” had not been established in the first place, officials would not have been able to carry out their proper functions.

The advocacy of this kind of “politics of the worthy” on the part of the bureaucrats grew up slowly within the Han institutional context. In the system of selection and recruitment, the creation of the office of jian-da-fu 諫大夫 was one of its expressions, and ultimately this advocacy on the part of the officials came to constrain the emperor himself. The emperor himself had to be “Worthy” Thus it could happen that hereditary imperial succession was called in question, and the notion of abdication or non-hereditary cession of the throne came to the surface in Han politics. The establishment of Wang Mang’s regime can be interpreted as an inevitable result of this.